



桂芳久様

三島由紀夫

## 『<sup>ミンビ</sup>閔妃暗殺』

正田 庄次郎

角田房子さんがお書きになったものに、『閔妃暗殺』<sup>①</sup>という本がある。いまから4年程前1988年に初版が刊行された。以来、私は講義でこれを紹介し、学生に読むようにすすめている。角田さんがこの本を書いたのは、偶然といえは偶然のことであった。元駐韓大使の後宮<sup>ウシロフ</sup>さんに会い、話が1974年8月15日におきた朴大統領夫人射殺事件に及んだ。たまたま犯人の文世光が、在日韓国人であり、日本の旅券を所持していたことから、日本大使館はデモ隊に囲まれ緊張に包まれた時の話になった。後宮さんは、当時の韓国大衆の日本に対する怒りがどんなに激しかったかにふれたうえで、角田さんに、怒りの声にまじってあちこちから「日本はまたも我が国母を殺した」という声がきこえてきたのですが、その意味が分りますかと質問した。「またも」という意味を分りかねた角田さんに、後宮さんは、明治28年(1895)の「閔妃暗殺事件」にふれ、それが韓国人にとって日本を考える原点になっており、小説やテレビ・映画でくり返したりあげられ、中学生でも知っている、日本でいえば「忠臣蔵」のようなものであることを話した。

韓国では誰でも知っている事件を、自分をふくめて、加害者の日本では一般に知られていないということへの驚ろき、これが角田さんを「閔妃暗殺事件」の全貌解明に向ってつき動かしていったのである。1982年には、日本と中国・韓国との間に、教科書をめぐる摩擦がおきている。

恥かしい事だが、私が「閔妃暗殺」を知ったのもそんなに昔のことではない。福沢諭吉の研究の一部として、福沢と朝鮮との関わり

を調べる必要が生じた。この時に手にした山辺健太郎著『日韓併合小史』<sup>②</sup>ではじめて「閔妃事件」を知った。26年前の1966年の事であった。分量にして僅か6頁の記述であったが、そこに示された歴史的事実は私にとって衝撃的であった。日本の公使が先頭に立ち、日本の守備隊に、日本人の抜刀した民間人が加わり、目撃者のいる中を、王妃の住居景福宮に押し入り、閔妃を惨殺し、その死体を凌辱したのち石油をかけて焼いてしまうといった出来事を私はどう考えたらよいのか。しかも問題になった後も関係者は罪に問われることなく、大半の者は出世したという。

それ迄も通史の域を出なかったにせよ、私は朝鮮に対する日本の侵略の歴史を読んではいたが、考えてみるとあくまでそれは、民族間の支配・被支配の一般的な認識を出ていなかった。創氏改名といっても、もう一つ、傷の深さを理解できなかった。しかし、「閔妃事件」は、朝鮮に対する日本の同化政策が、一般的な他民族支配の域をこえたもの、名前を奪い、言葉を奪い、宗教を奪い、およそ精神的文化的な意味で民族の抹殺に等しいものであった事を直感させるに充分であった。

私は、福沢と朝鮮の研究結果を、1966年に「福沢諭吉の東洋政略」<sup>③</sup>として発表したのが、考察を、「閔妃事件」の前、壬午軍乱(1881)と甲申事変(1884)迄でとどめたのも、事の大きさから厳密な調査の上でなければ福沢評価につなげられないと考えたからであった。この課題は、まだ果されないうる。

それ以後読んだ2冊の本<sup>④⑤</sup>からも、日本が朝鮮に何をしたかについて多くを学んだ。とくにマッケンジーの本は、目撃者の証言とし

て、当時の世界に流布され、今日でいう、イラクのクウェート侵略と同様に、日本を国際的孤立に向けて追いこんでいった。閉鎖在会のおそろしさを改めて痛感する。

よく知られているように、ドイツ敗戦40周年にあたってドイツ連邦共和国大統領ヴァイツゼッカーが連邦議会で行なった演説<sup>⑥</sup>は、世界の人びとに強い感銘を与えた。この中で彼は、抑圧からの解放の日、5月8日を人びとが嘗めた辛酸を心に刻む(erinnern)日であるように訴えている。erinnernという言葉が演説のキーワードの一つである。単に過去の出来事を思い出すだけではなく、「内面化する」「血と肉とする」と意味をこめて、心に刻む(erinnern)という言葉を使っている。私たちは果して、朝鮮の人びとに与えた苦痛を、心に深くうけとめて戦後の40数年を歩んできたであろうか。

それにしても、毎夏くり返される8月15日の光景は何とかならないものだろうか。閣僚はじめ代議士諸公が黒ずんだ背広に身を包んで、カメラの砲列を、肩をそびやかし、かきわけて靖国神社に参拝するあの光景である。

ヴァイツゼッカー大統領は、さきの演説の中で、追悼の対象につきの人びとをあげる。

- ・ドイツの強制収容所で命を奪われた六百万のユダヤ人
- ・戦いに苦しんだすべての民族、とくにソ連・ポーランドの無数の死者
- ・兵士として斃れ、空襲等で命を失ったドイツの同胞
- ・虐殺されたシントンティ、ロマ、殺された同性愛、精神病患者、宗教上政治上の信念の持主
- ・銃殺された人質、レジスタンスの犠牲者(宗教家・労働組合員、共産主義者)

対象から指導的立場に立った職業軍人が慎重に外され、被害者への追悼に重点がおかれ

ている事をどう考えるべきであろうか。戦後40数年を経過したいま、過去の戦争に対する深い反省を欠いたままに来たとがめの重さを痛感する。人びとの心にしみる謝罪の言葉が出ない政治家の姿は、同時にわれわれ国民の姿でもある。道義は国の基礎であり、「国際貢献」はそれを前提になり立つものであろう。

「過去に目を閉ざす者は、結局、現在にも盲目になる。」(ヴァイツゼッカー) (経済学)

#### <参考図書>

- ① 角田房子『閔妃暗殺』(916/Ts82)
- ② 山辺健太郎『日韓併合小史』(221.05/Y18)
- ③ 正田庄次郎『福沢諭吉の東洋政略』(304/Sh95c/c.2業績)(教養部紀要3号)
- ④ 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』(221.06/Y18)
- ⑤ マッケンジー『朝鮮の悲劇』(081/To82/222)
- ⑥ 『荒れ野の40年——ヴァイツゼッカー大統領演説——』(081/I95/55/c.3)

#### 夏休み中のお知らせ

- 1) 長期貸出  
貸出期間  
7月20日(月)～9月18日(金)
- 2) 開館時間  
7月23日(木)～9月14日(月)  
平日 午前9時から午後5時まで  
土曜日 午前9時から午後1時まで
- 3) 閉館  
8月10日(月)～8月15日(土)  
一斉閉館の為

## 平成 3 年度 教養図書館統計

1. 開館総日数 271日

2. 年間入館者数 119,589人

1日平均入館者数 441人

3. 施設使用状況

記念室	研修室	ゼミ A	ゼミ B	教職員閲覧室	合 計
10	116	257	106	4	493

4. 学年別〈所属別〉貸出比率

	単 行 本	雑 誌	合 計	比 率 (%)
1 学 年	4,219	213	4,432	78
上 級 生	1,227	56	1,283	22
学 生 計	5,446	269	5,715	80
教 職 員	1,177	263	1,440	20
合 計	6,623	532	7,155	100

5. 雑誌現行受入タイトル数

	購 入	寄贈・交換	研究室用	小 計
国内雑誌	299	477 (418)	17	793 (418)
外国雑誌	50	2	8	60
合 計	349	479 (418)	25	853 (418)

( ) 内の数は紀要のタイトル数を示す

6. 雑誌タイトル別貸出ベスト5

順位	合計	雑誌名	学生	教職員
1	50	教養部紀要	50	0
2	22	判例時報	0	22
3	20	月刊アクアライフ	20	0
4	17	日経バイト	15	2
5	15	ニュートン	15	0

7. 現在蔵書数（視聴覚資料・単行本）と平成3年度貸出数

(平成4年3月31日現在)

蔵書数		比率 (%)	主 題	NDC	貸出数(冊)	比率 (%)
AV資料	単行本(冊)					
802	4,994	7	総 学	000	77	1
11	6,612	8	哲 学	100	374	6
24	7,863	10	歴 史	200	284	4
98	11,089	13	社会科学	300	420	6
109	20,166	24	自然科学	400	3,498	53
35	2,436	3	工学・工業	500	238	4
105	1,141	1	産 業	600	70	1
691	5,327	7	芸術・体育	700	352	5
392	4,645	6	語 学	800	297	5
60	14,677	18	文 学	900	818	12
0	2,386	3	未 分 類	新書他	195	3
2,327	81,336	100	合 計		6,623	100

## To be or not to be

石田 健 郎

To be or not to be — that is the question.

(生きるべきか、死ぬべきか、…)

シェークスピアのハムレットに出てくるこの名セリフ、状況としては、生きるも地獄、死ぬも地獄のつらい心境を表現しているのでしょう。

この「be」を辞書でひいてみると、まっ先に「存在する」という意味が出ています。そこで「存在するか、存在しないか」と訳せば、これ程適切に現在の数学の中心課題をいい表わしているセリフも無いと思う。まさに言葉の魔術師シェークスピアが数学の為に書いてくれたキャッチフレーズの感がします。

数学書をめくってみますとどこかに必ず「解の存在」あるいは「存在定理」といった言葉が出てきます。数学を研究しようとする人は存在問題にどこかで取り組む必要が起るでしょう。

解が存在することがわかって始めて、その一意性とか、その性質とか、解の求め方とか次の段階に進み得るのです。

代数学の基本定理と呼ばれる定理は「 $n$ 次方程式には  $n$  個の解が存在する。」と言っています。しかしアーベルとガロアは5次以上の方程式にはこれを解く一般的な解法は存在しないということを証明しました。解はあるがそれを求める術がないということです。

さて数学で- (マイナス) をかけると符号が変わるという規則があります。この規則自体も考えてみれば何かピンと来ない所があると思いますが今は先に進みます。

この規則によりますと  $x^2$  は常に非負で  $x^2+1=0$  ( $x^2=-1$ ) という式は成立せずこの

式には解が存在しないことになります。代数学の基本定理に矛盾するわけですが、歴史的にはこちらの話が先で、こちらが解決と同時に代数学の基本定理が出たのでしょうか。

「解が存在しない」で話が終らない所に又数学の発展があります。

数学者は例外を嫌い、一般化を好みますので  $x^2-1=0$  に2つの解があり  $x^2+1=0$  に解が無いではガマンできなかったのでしょうか。何とか解を作ろうとしたから当然問題が起ります。事実16世紀半ばにこういう話が出て18世紀の末まで200年以上、この解の存在をもてあましていたのです。数学は仮定、結論も明瞭で答もハッキリしていると思われがちですが、こういうcaseもあるものです。

虚数  $i$  という名前からして、漢字(感じ)からして嘘臭い数(?) をこの式 ( $x^2+1=0$ ) の解の1つとして導入し、このうさん臭い数に正当な数としての市民権を与え、数として認知したのが大数学者 Gauss (1775-1855) である。彼がこの  $i$  を使って、更に複素数を使って先の代数学の基本定理を証明したのです。

なお同じころ、ノールウェイの測量技師ウエッセル (1745-1818) も複素数を考えたのですがその着想は普通の数は一か一の2方向しか持たないが、無数の方向のある数は考えられないかといったことからだそうです。順序、大きさを表現する数から、それらの性質の無い、数としては不思議な数「複素数」が生まれたのです。なおこの複素数を英語では complex number (複雑な数) といいます。日本語では1と  $i$  の複数の数を素(モト)にしてできたからだそうです。

解の存在しない所から生れた数、虚数。この出現の過程は、インド人が何も存在しない状態を0で表現し0を元(素)にして無数の数を生み出したのと何か似ている様な気がします。0という記号を使って始めて無数の数の表現が可能になったのです。

似ていると言えば、西遊記のモデルである玄奘三蔵がインドより持ち帰り中国語訳した般若心経というお経の中に、…色不異空、…、…、色即是空、空即是色、…、…という「空」と「色」という字が出てくる一連の言葉がある。この「空」はインドの数学の0の意で、「色」には存在するという意味もあるとのことで、空すなわち無が空(ソラ)の如く無限の広がりを持った世界を創り出す根元となっていると解釈してみるのはどうでしょうか。いずれにしろこの一連の言葉と、0の発見、虚数の発見との間には何か共通の思想が流れている気がします。

最後に解が存在しないのに*i*などというものをもち出して、解があるようにしたのはゆるされるのかという問題が起る。このやり方でいくと解の不存在などはあり得なくなるのではないか。

2次式  $x^2+1=0$  の解の1つに*i*を持ち出すことによって異なった取り扱いをしていた式が1つの公式に統一され、更に3、4、…、一般の*n*次方程式の解も複素数を使って表現される。複素数を更に広げる必要はなく複素数で行き止まりである。

ただ広くすればいいというのではなく有用性が問題となるのだろうが、それも数学の発展と流れの中でのことであろう。

(数学)

## 相互貸借について

探している文献が教養図書館で見つからないとき、あきらめたりしないで1階メインカウンターで相談してください。必要とする図書や雑誌論文が当館にない場合、他の図書館との協力によって、それを取り寄せることができます。相互貸借は、閲覧・貸出・複写のいずれかの形で行われます。申込みは、1階メインカウンターで「相互貸借申込書」に記入してください。

- ※ 閲覧 相手館に連絡し、紹介状を発行します。
- ※ 貸出 国立国会図書館・相模女子大学付属図書館その他貸出可能な図書館のものに限ります。
- ※ 複写 文献を複写物の形で取り寄せます。現物が届くまで約1週間を要します。(FAXで申込んだ場合、早くて2日で現物が入手できます。)

複写料金は相手館により異なりますが、郵送料その他手数料を含めてすべて申込者の負担になります。

## 閲覧証をまだ受け取っていない人へ

図書館を利用する時には、閲覧証が必要です。まだ受け取りにきていない人は、教養図書館1階メインカウンターまで来て下さい。

閲覧証は、卒業するまで有効です。

## 三島由紀夫の署名入り初版本の数々

桂 芳 久

私が戯曲「なよたけ」の作者の加藤道夫（昭和28年自盡）の紹介状を持って初めて三島由紀夫の目黒区緑ヶ丘の邸宅を訪れたのは昭和25年で私は学部2年生であった。三島由紀夫は22歳で昭和22年に東大法学部を卒業し、高等文官行政科試験に優秀な成績で合格して大蔵省に勤務したが、翌年決然と大蔵省を辞職して文学の道を志した。23歳の時である。（三島さんの満年齢が昭和の年数と同じであるのは45年の生涯を考えると象徴的である。）

初めて会った昭和25年は朝鮮戦争が6月25日勃発した時で、その年の6月末に書下し長編小説第2作の「愛の渴き」を出版したばかりであった。

それから私は月に数回は自宅に遊びに行くことを許されるようになった。まだ戦後の雰囲気が残る銀座のバーにもよく連れてゆかれた。私の文学修業はこのようにして始まり、私の処女作が文芸雑誌『群像』に三島由紀夫の推輓<sup>すいばん</sup>で掲載されたのは学部学生の時である。

『金閣寺』は昭和31年1月号の『新潮』に10月号まで連載されたが、三島さんが京都に取材中に一緒に行ったことがある。私は小説

では三島さんのこの作品が最も優れていると思っている。それにしても三島文学の重要な部分は戯曲にある。古典の能楽を本歌取りした「近代能楽集」の作品は海外で最も多く上演され絶賛をうけている。

表紙の三島由紀夫の署名は「近代能楽集」のもので毛筆である。「書は人なり」と改めて認識させる。現今のようなワープロで自筆の原稿もなくなりつつある状況は文学の不毛をむかえている。

『潮騒』の裏表紙にはその年に私が結婚したので次のような献辞が書かれている。

「大兄の華燭に  
このハッピー・エンディングの小説を捧ぐ  
三島由紀夫」

（文学）

### —— 編集後記 ——

今回は、正田先生と石田先生にエッセイを、桂先生に表紙解説をお願い致しました。夏休みを利用して紹介された本を読んでみては、いかがでしょう。

教養図書館の統計類もこれからの図書館利用の参考にしてください。

閲覧ニュース67号

1992.7 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話 (0427) 78-8005